

## 海外派遣研究助成事業による研究の成果

研究者氏名	西山 菜々子 印
所属機関	NPO 法人 JORTC 臨床研究部門
<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究に従事した外国の研究機関名</li> <li>・参加した国際学会・会議名</li> </ul>	<p>16th World Congress of the European Association for Palliative Care (第16回ヨーロッパ緩和ケア学会学術大会)</p>
渡航期間	自 2019年5月21日 至 2019年5月27日
<ul style="list-style-type: none"> <li>・研究内容</li> <li>・国際学会・会議内容</li> </ul>	① Poster Presentation ② WHO Review に関する研究協議
研究成果 (要約: 800字)	
<p>今回私は、ドイツのベルリンで開催された 16th World Congress of the European Association for Palliative Care において示説発表を行い、各国からの緩和ケアに従事する医療従事者および研究者と討議する機会を得ることができました。発表内容は「What is the Purpose of the Massage Used by Rehabilitation Therapists for Terminal Cancer Patients?」というテーマで、リハビリテーション（以下、リハビリ）の手技の一つであるマッサージが、どのような目的で終末期（死亡前3週間程度）のがん患者に対して実施されているかを検討した単施設後ろ向きカルテ調査研究の結果を報告しました。対象は、過去3年間に緩和ケア病棟または一般病棟に入院中の終末期がん患者で、リハビリ開始時に抗がん治療をしておらず、リハビリを2週以上かつ死亡した週まで継続した患者とし、109名（平均年齢76歳、女性54%）が該当しました。マッサージは、開始週-死亡3週前-死亡2週前-死亡1週前にそれぞれ73%-79%-90%-96%の患者に用いられており、高い頻度で実施されていました。また、リハビリ開始時に患者に苦痛症状があった場合には、単なるリラクゼーション目的ではなく、まずはマッサージを行うことによって苦痛症状の軽減を図り、それを契機として患者の活動能力の拡大および維持を狙うといった目的としても用いられていた可能性について報告しました。また、本年度参画する WHO review 研究の代表研究者（英国 Kings College 所属）と対面での協議を行い、今後の進行について確認することができました。本研究は日英の国際共同研究であることから、今後研究を円滑に進めていくために対面協議の場を持てたことは大変有意義な機会となりました。</p> <p>学会の企画プログラムでは、私の研究テーマであるリハビリも該当する＜複合的介入＞を行う場合の臨床研究の方法論に関するシンポジウムがあり、大きな学びとなりました。最後に、本学会発表を支援くださったがん研究振興財団のみなさまに心から感謝いたします。ありがとうございました。</p>	